

---

# 茉莉の日記

ん？ん？ん？ん！！

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

茉莉の日記

### 【Nコード】

N9663E

### 【作者名】

ん？ん？ん！！

### 【あらすじ】

【世界の狂う重さ】のサイドストーリーです。コレを読まなくても、一応スジは通るように書くつもりですが、この中に、本編の複線が多数張られる予定ですので、読んでいただけると嬉しいです。

× 栞 01 (印象)

目が覚めると、枕元に栞が立っていた。思わずベッドから転げ落ちそうになる程びっくりした。

そんな僕を見て、栞はいつもと変わらぬ落ち着いた声で聞いてきた。

「ねえ茉莉君。一つ君に相談があるのだが。」

「……………そ、相談？」

「くくくく、驚きすぎだよ。君はいつも実にいいリアクションをしてくれるね。」

馬鹿にされているようで、少し腹が立った。

「いいだろ、別に。……………で、何さ、相談って。」

「ふむ。相談というよりは質問なんだが。君は誰の事が好きなのかな？」

「はあ？」

何を言い出すんだこの女は。

「ん？聞こえなかったのかい？だから、君は誰の事が好きなんだい？」

「いや、聞こえているけど。ん、いや、まあ、え？」

「あはは。何をしどろもどろしているんだ。ここのみんなの第一印象

象はどうか、って聞いているんじゃないか？」

そんな馬鹿な。どういう解釈をしたらそういう事になる。栞は確かにさっき誰の事が好きって聞いて……………ん？待てよ。うーん。めちゃくちゃひねくれた考え方をすれば、そういう風に取れなくもない……………か？

だとしても。

何でそういう聞き方をするんだよ！！

……………つと、危ない危ない。ここで逆上したら、栞の思うつぼだ。

僕は落ちついて、聞かれた事を答える事にする。

「そうだね。みんな第一印象は凄くよかったよ。仲良くなれそうな気がする。」

僕がそう答えると、ちつ、と舌打ちが聞こえたような気がした。

そして栞は、用は済んだといわんばかりに、

「そうか。昨日は大変だったね。今日はあまり無理をしない事だ。」  
と言って、部屋を出ていった。

× 穎娃 101 (無意識)

食堂へと続く、白く細長い道を、一人で歩く。  
カッン、カッン、と嫌な足音が響く。

…………… 本当に、何度通っても、この道は好きになれない。

カッン、カッン。

籠るように響く足音が、不安を掻き立てる。

ふっ、と目の端に、黒い影がよぎった。  
ん？ 今僕を追い抜いていった黒い影。

アレは……………

「穎娃君！-！」

「ああ、茉莉さん。奇遇ですね。こんな所で会うなんて。」

奇遇も何も、食堂へと続く一本道なのだから、ココは割りと会う確立が高いと思うんだけど。…………… そうでもないのか？

「それより危なくないの？ 歩きながら本を読むなんてさ。」

「ああ、コレは癖みたいなものですので。慣れれば意外と大丈夫なものですよ。」

危ないと思うんだけどなあ。

「ふうん。でも、人にぶつかったりとかしないの？」

「いえ、人がいれば、【能力】で大体の位置が分かりますから。それ以前に、人とすれ違う事なんて、【此处】では滅多に有りませんし。」

「そういうものなんだ。」

「ええ、そういうものなんです。」

…………… 本当に【能力】で位置が分かるんだとすると、僕を無視して追い抜こうとしていた事にならないか？

…………… いや、まさか。頼娃君に限ってまさかそんな事は。と僕が自問自答していると、慌てたように頼娃君が付け加えた。

「あ、いえ、別に茉莉さんの事を無視しようとした訳じゃないですよ。本を読むのに夢中になって……。つい無意識に【能力】を使ってしまったみたいで。」

やはり理由が有った事に、僕は何だか少しほっとした。

「あ、今から食事ですよね、茉莉さん。よかったら、ご一緒しませんか？」

喜んで、と返事して、僕たち二人は食堂へと歩いていった。

×英知ー01（林檎）

「よー茉莉。お前オレンジ派なの？」

自販機の前でオレンジジュースを飲んでいると、英知が片手を上げながら僕に聞いて来た。

「いや、特にどっちが好きとかは無いよ。気分によるね。」  
僕も片手を上げて挨拶を返ししながら質問に答える。

「ふーん、そっか。俺はりんごジュースが凄いい好きでさあ、」  
言いながら、カシャリカシャリと小銭を入れていく。

「ここに來るとつい買っちゃうんだよ。」  
ピツ、と宣言通りにりんごのボタンを押す英知。何だか少し微笑ましい。

ガシャリ、と落ちて來た缶を拾い、またカシャリシャリと小銭を入れていく。

「ん？お使いかい？」

「そーなんだよ。あいつら自分から動く気が無いんじゃないか、つてたまに思うよ。」

ガタ、ガシャン。カシャリ、カシャリ。

「ま、俺もそんなに嫌ではないからいいんだけどな、いい息抜きにもなるし。」

ガシャン。

「あ、そーだ。今から俺たちの部屋に来ないか？茉莉。鞘香が何か新しいの作ったらしいぜ。名前はちよつと忘れちまったけど。」

「いや、是非行きたいんだけど。栞と待ち合わせしてるんだ。悪いけど、また今度誘ってくれ。」

にやりと笑い、やけに小さな声で英知が聞いてきた。

「お前らやけに仲いいじゃん？何？付き合ってたんの？」

「なー！ち、違うよー！僕はただ、【能力】とかの説明を受けてるだけで……………」

「くく、焦る所が怪しいなあ。」

「いや本当につ……………」

「あはは、いいいいよ。じゃ、またな、茉莉。」

「……………ああ。」

何だかもやもやしたまま会話が終わってしまった。

もやもやを流し込もうと、ジュースを一気におおつてみたが、やはり何の意味もなかった。



×千寿ー01（未知）

僕の目の前には、水晶を見ている千寿さんがいた。

といつても、覗き込むのではなく、ただ単に見ている。

そこから何かを読み取ろうとしている気配は無い。

その上、視線は水晶にあるものの、彼女の両手にはトランプのばば抜きをする時のような感じで広げたタロットカードがあり、もう何がしたいのか分からない。

タロットカードってそうやって使うものではないと思うんだけど。

英知が鞘香さんが居れば、これは何の儀式なのか聞くことも出来るのだが、あいにく二人ともここにはいない。

鞘香さんの新しい【微妙に】シリーズの実験という事で、二人とも何処かに行ってしまった。

二人きりになると、千寿さんは、「そうね、いい機会だから、占ってあげるわ。」と言い、何やら準備を始めた。

断るという選択肢は与えられてないらしかったので、占って貰う事になった。

……んだけど、何だろうこの状況。

水晶をどこか虚ろな目で見ながら、手を前に押し出し、鞘香さんが言った。

「ほら、引きなさい。」

命令口調かよ!!

……まあいいけど。

何枚引くか言われなかったけど、こういう場合はおそらく一枚だろう。

僕は一枚を選び、まさにば抜きのような感じで引き抜いた。

「ふーん、【塔】の逆位置ね。」

逆かどうか、この場合どうやって判断するんだろうか。  
千寿さんの采配次第でどっちにもなるんだけど。

……まあ、コレが逆位置というのなら逆位置なんだろう。

「……………」

「……………」

二人とも沈黙。

つて、ええ!?

何で沈黙!? 結果とか言ってくれないの!?

「……………あの、千寿さん、結果は?」

「きつと悪い事が起こるわ。」

また大きく括ったな。

悪いと思えばなんでも悪い。

そんなの主観な問題な訳で。

「いや、もうちょっと詳しく……………」

「だから、きつと悪いことが起きるわよ。」

「……………」

どうしようかと、半ば真剣に悩んでいると、千寿さんは、飄々とこ  
う続けた。

「冗談よ、今からが本番。」

千寿さんはそういうと、顔を隠していたベールを外し、  
僕の顔を左右から両手で押さえつけ、自分の顔を近づけて来た。

綺麗な顔立ちをしている。

僕は何だか恥ずかしくなって、視線を逸らそうとしたが、

「動かないで!!」

と怒鳴られ、視線の自由も失ってしまった。

視線が交差する。

千寿さんに目を覗かれる。

その奥の何かまで、覗かれる気がした。

時間にして5秒ほどだろうか　僕としてはもっと長く感じた訳だ  
けど　僕の目を見ていた千寿さんは、やがて眉を顰め、僕の顔  
を離れた。

おかしいわね、と呟く声が聞こえた気がした。

「……………」

「……………」

二人してまた沈黙。

いや、だから……………」

「あの……………結果は？」

馬鹿にしたような視線で      きっと気のせいだろう      僕を見ながら、千寿さんは堂々と言った。

「分からないわ。」

……………やれやれ。【此处】の人間は、やっぱり皆、何かしらおかしいらしい。

はいそうですか、と引き下がる訳もなく、もう少し詳しく聞いてみる。

「いや、分からない、というのは？」

「だから分からないわ。」

「いやでも      」

「五月蠅いわね、分からない物は分からないの！！そんな事も分からないの！？」

そんな事とも言われても。

それだと占いとは言わないのではないか。

僕を無言で睨んでいた千寿さんだったが、しばらくすると視線を落とし、小さな声で言った。

「悪かったわ。今日は調子が良くないみたい。……………出て行って、もらえるかしら。」

その言葉に逆らう理由も、勇気も無かったので、僕は黙って部屋をあとにした。

×フォリスー01（一方的）

「ちょっとあなたそこのあなた、あなたよあなた、分からないのかしら、そんな訳ないわよね、という事はあれなのかしら、またいつものシカトかしら、どういづつもりなのよいつもいつもそんな事をして、みんなみんな私を無視して何がそんなにたのしいのかしら、まったく困っちゃうわね、というか」

背後から呼びかけて来るこの声は、というかこの喋り方は。

何かいつもいつもとか言ってるけど、彼女と会うのはコレでまだ二度目の筈なんだけど。

振り返ると、予想通り、綺麗な金髪の少女が立っていた。フォリスだ。

喋り続けながら、目は僕の事をキツ、と睨みつけている。

.....さて、どうしたものか。

「やあ、フォリス。何か用かな？」

「何か用かじゃないわ、その言い方だと、用がなかったら話しかけたら駄目みたいじゃないの、話しかける時には必ず用があるのかしら、そうなのかしら、そうなのかしら、そうだとしたら、すぐに話すことなんてなくなりそうだと思うんだけど、意外とそうでもないのかしらね、あもしかしてあなたは、話す時に必ず何かしらの用を含む言葉を含むとかいうそういう人種なのかしら、すごいわねそれはなんだか逆に少し尊敬するわ、用を」

ああ、やっぱりか。

やっぱりこんな感じになるのか。

彼女とどう付き合えばいいのかよく分からない。

……とにかく、何か色々言っではいるが、今は別に用があったから話しかけて来た訳ではないらしい。

「その喋り方って、【代償】なのかな？」

言って、次の瞬間にしまったと思った。

彼女の勢いに押されて、つい冷静な判断力を失ってしまったみたいだ。

……そんな事聞くような事じゃないだろう、自分。

「【代償】って何かしら、何かみんな【代償】だの【能力】だのって私にいうけど、もしかして私を馬鹿にしてるのかしら、馬鹿にしてるのね、そうなのね、そうやって私が困っているのを見て楽しんでるがいいんだわ、いつか手痛いしっぺ返しをくらわしてやるのよ、そのためにも今は」

んん？

どういう事だ？

【能力】の事を知らない？でもそんな筈はない……と思うんだけど。

それとも、それと知らずに【能力】を使っているのか？

もしくは、はぐらかされたのか？……そんな風には見えなかったんだが。

が、もしそうだとしたら、たいした演技力だ。

「……………」

何を言おう。というか。うーん。困ったな。本当に。

「あそうだわそうよ、忘れてたわ、あなたのせいよ、そういえば私は映写室にいくのよ、そして【アレ】を完成させてそして、

あとにかく私はこれでいくからまたね。」

来た時と同じように一方的に会話を打ち切り、フォリスは言ってしまった。

【アレ】ってなんだろう。  
それに何だかドツ、と疲れた。

……フォリスとの会話のコツを、今度彗にでも聞いてみよう  
と思った。



× 栞 102 (十対五十)

「ねえ茉莉君。一つ君に相談があるのだが」

気配も無く、いつの間にか枕元に立っていた栞が言った。

英知から勧められた本に、すっかり没頭していた僕は、本気でビビってしまった。

……………何かアレだよ、栞さん。

あなた、もう僕を驚かすことを楽しみの一つにしてるよね？

くつくつ、つと一通り笑った後、栞はもう一度同じ事を言った。

「ねえ茉莉君。一つ君に相談があるんだ。」

相談はいいんだけどね。驚かすのは止めて欲しい。

「何かな？あ、ところで栞、今何時？」

「今は13時39分だ。                      あの時、10円玉と50円玉の勝ち負けを決めたいんだよ。」

時間を分単位まで言うところが栞らしい。

強さってどういう事なんだろうか。

「強さ？」

「うん。常々思っていたんだけどね、硬貨の勝ち負けをしっかりと決めておいた方がいいと思うんだ。だからまずは10円と50円。」

「……………よく分からない。」

「ふん。じゃあ君は、10円玉と50円玉と、どっちが強いと思う

「？」

「……………50円玉、かな？」

「何でそう思う？」

「いや、何でって、……………値段？」

「はっ！！安易な。」

いや、馬鹿にされてもさ。

「じゃあ君はどう思うのさ？」

「だからそれを決めるんじゃないか【硬貨レベル】を。」

ずるい！！

それはずるいぞ琴。まあソレを琴に言っても仕方ないんだけど、その前に気になる言葉が……………

「【硬貨レベル】？」

僕が聞くと琴は、気まずそうに言った。

「……………忘れてくれ。」

なんか久しぶりだな。琴のこの微妙に困った表情。

「安易も何も、値段意外に何があるのさ？」

「これだから貧困な想像力の人間は困る。例えば数だ。50円玉は一枚で50円だが、10円玉は5枚で50円だ。」

「……………それが？」

「数の暴力。」

「……………少ない方が、嵩張らなくて便利なんじゃ。」

「一枚落としたとしても、10円玉なら被害は10円で済む。50円玉なら50円だ。」

「んな。そうだけど。それは問題が摩り替わってるよ。」

「そうかい？なら」

しばらくの間意見を交わしたが、結局どちらが強いかは決まらなかった。

× 亜空 101 (例外的)

この食堂は本当に不思議だ。

どういう仕掛けになってるんだろう。

誰かが作ってるんだろうか。

もし誰かの【能力】なのだとしたら、ずいぶん変わっている。【食事を作る能力】とか、意味が分からない。

……………まあ、別にどうでもいいか。

食事の水準は基本的に高いし、

労せず食事にありつけるなんて、幸せな事だ。

働かざるものも、【此处】では食事に困らない。

とかどうでもいい事を考えていると、僕の斜め前に、誰かが座る音がした。

「いよっつ！！どした！？難しい顔して、考え事か！？」

亜空だった。この微妙な位置関係は、おそらく【代償】のせいだろう。

「いや、そんなに大したものじゃないよ。……………僕そんなに変な顔してた？」

「ああしてたしてた。アウストラロピテクス版考える人、みたいな。」

どんな顔だよ!!

「……………気をつけるよ。」

「ああ、いや、冗談だって!!そんな深刻になるなよ!!」

分かってるよ。

冗談だって分かって返したんだよ。

もし本気で言われてたら、何かショックだよ!!

喋りながらも、亜空はどんどん食事を進行していく。

器用な奴だ……………というより確か亜空の【代償】って。

「……………君、凄い勢いで食べるね。危なくないの?ほら、  
【代償】とか。」

「お、聞きたいか?聴きたいかい兄さん!？」

変なテンションだなあ。まったくもう。

「あ、うん、まあ。」

「なら教えてしんぜよう。実はな」

そこでぐいと手を伸ばして、僕の耳を掴むと、急に小声になって続けた。

「実は、例外的に【触ってるものは認識できる】んだよ!  
!これが。」

「……………それにしてもその勢いは。」

「あははははは!!そこら辺はほら慣れたよ!!慣れ!!」

さいですか。

無駄に押され気味なまま、その奇妙な食事は終わった。

× 鞘香 101 (反撃実験)

「ほら、ほら、茉莉くん!! ほら!!」

ほらほら言われても、きつとこれ嫌な目に合うよね？  
触りたくないんだけど？ 鞘香さん。

「ほつらつ!! 早くっ!!」

ぐいぐい僕の身体を後ろから押してくる。

鞘香さんは、今日は熊のきぐるみを着ていなかった。

調子がいいのだろうか。それはいい事なんだけど、それとこれとは別な訳で。

じりじりと【びさそう】の方へと押されていく僕。

微妙にシリーズの新しい作品だ。動作するかどうか確認して欲しいらしい。

……… というかコレは、実験代という奴でしょ？ そつですよ、ね、鞘香さん。

ちなみに、正式名称は【微妙にサンドバッグ型反撃装置】だそうだ。

……… 嫌な予感しかしねえ!!

質量感のある赤い塊の方へと、少しずつ誘導されて行く。

英知は、大丈夫だって、とにこやかな笑顔で言いながら、僕の拘束を手伝っている。

何気に凄い力である。どういう風になっているのか分からないが、身

動きがほとんどできない。

関節でも極められているのだろうか？

……いや、助けてくれよ！！

「どうだった？」

にこにこしながら聞いて来る鞘香さん。

確かに反撃されて痛かったけど、想像とは大分違った。

「……………なんですか、コレ？」

「だから【びさそう】だよ！！」

「いや、そうではなくて」

まだひりひりする指先を押さえて続ける

「何で反撃方法が電気ショック何ですか？もうちょっと直接的なのを想像してたんですが。」

「を？何でって？気分だけど？それにそんな直接的な反撃なんてされたら痛いじゃない？」

気分かよ！！

……………指先がひりひりする。

もっと出力を上げたらこっちの方が恐いかもしれない。



……というより、そもそも、  
「何でこんなものを作ったんですか？」

僕がそう聞くと、一瞬不思議そうな顔を浮かべた後、直ぐに満面の笑みを作り、断言した。

「だって楽しいじゃない!？」

「……………」

もっと色々言いたい事はあったんだけど、その楽しそうな顔を見ているうちに、何だかどうでもよくなってしまった。

静かに溜め息を吐くと、いつの間にか横に立っていた英知が、そつと僕の肩に手を置き、

「そのやるせない気持ち、よく分かるよ。」  
と、言った。

× 栞 03 (確立一)

「ねえ茉莉君、一つ君に相談があるのだが。」

今日もそう言つて、栞は僕に話しかけて来る。

栞の方が頭がいいのだから　　確実にそう、とはもちろん言えないが、僕はそう感じている。【此処】の事や【能力】の事。他にも色々な事を栞から教えてもらっているからかもしれない　　相談も何もないものだ、と思う。

でも、そうやって、変わらずに話しかけてくれる事に、いつしか僕はある種の安心感を覚えているのも事実だった。

安定。

変わらない物。

変わらない者。

僕はそれらのモノを好んでいる。

【能力】が発現してから、周りの人の、

僕を見る目が変わった。

接する態度が変わった。

誰かに通報され、政府の施設に隔離された。

その後……………あれ、その後、どうしたんだっけ？何で僕は今【此処】にいるんだろう。

……………まあいい。とにかく僕は、今のこの生活が好きだ。だから僕は、何も変わらないように、いつものように栞に答える。

「今日は何かな？」

「英知君に借りた本なんだけど、この部分の探偵の証明は、間違っているよね？」

指差しながら本を僕の方へと寄せる。

その本は、僕も前に読んだ事があるものだった。でも、探偵の証明に疑問なんて別に抱かなかったけど。

栞の指差す部分を見る。がやはり何もおかしい点は無いように思う。

「それで」

「…何がおかしいのか分からないんだけど？」

僕がそういうと栞は、少し驚いた顔をして、その後呆れた声で言う。

「君はこの部分に何の疑問も抱かなかったのかい？」

そう言われても。

「いや、別に、何も。」

「この部分の確立の話だよ？」

「いや、ごめん、分からない。」

すると栞は何を思ったか、本をパタンと閉じ、

「仕方ない、じゃ、実際にやってみようか。」

と言って、僕の本棚をこそそこそとあさり始めた。

「え？ちょ、何してるの？」

「ん？栞の挟まってる本をね、探してるんだよ。もちろん本に挟む方のだ。」

「それは分かってるよ。……………というか、今持ってる本に挟まってたと思うんだけど。」

「これはデザインが気に入らない。……………まあ君も年頃の男の子だからねえ。焦る気持ちも分かるよ。ふふ。」

別に焦ってない、と反論する間もなく、栞は、三冊の本をベッドの上に並べながら言った。

「始めようか。」

## ×千鶴子ー01（革命的）

「あ、来たわね。映写室へようこそ、茉莉君。」

部屋を開けた僕を、迎えた千鶴子さんに、怒った様子は無かった。計らずも、約束を破ってしまった形になっていたので、文句の一つも言われるかと思っていたが。

「ちょっと貴方ちよつと、部屋に入る時はノックをするのが常識つてものだと思うんだけどそこら変は無視なのかしら、人間としてどうかと思うわ、小さいころに親に教えてもらったでしょそのくらい、もし私か千鶴子が着替えていたりしたら、あそうかそうねそれを狙っていたのね不潔だわ、だいたい貴方は」

が、代わりに、隅の方で何か機械らしきものを弄っていたフォリスに、色々と責められた。

いや、僕、ノックしたけどね。

それでどうぞって返事も貰ったからね。

フォリスが聞こえてなかったただけだと思うよ。

と言っても取り合ってもらえるとは思わなかったので、僕はその批判を甘んじて受ける事にした。

フォリスについて琴に相談してみた所、

「そんなの私に聞かれても困るよ。まあ強いて言うなら、適度に受け流すのがいいのかもしれないね。」

という返事が返ってきたので、それを早速実践してみた訳である。

「　　なんというか、普通の部屋ですね。どのへんが映写室なんですか？」

「まあ今はねー。昨日来てれば面白かったのに。もしくは明後日。」  
「何だろう。」

「あの、それはどういう意味で？　というか、来る日によって変わったりするんですか？」

「いやー色々と変わるんだよ？　大体三日に一回、かな。……んーそうだね、□では説明し難いから、気になるのなら明後日の同じ時間にまた来るといいよ？」

「ええ、はあ、よく分りませんが。二日でそんなに変わるんですか？」

「　　変わるわよ変わるから言ってるんでしょ貴方馬鹿なんじゃないの、変わらないのに言うわけじゃない、そんな無駄な嘘をついてる時間も惜しいのよ千鶴子は、むしろ貴方と会話している時間も惜しいくらいなのよ、それは私も同じなんだけど、つまり貴方なんかに構ってる時間は無いって事なのよ、それなのに貴方ときたら約束を破った上に手土産の一つも持ってこないで何様のつもりなのかしら、あでも俺様とかくだらない事言ったら張った押すわよ、それから」

「フォリスの言葉をBGMに、会話を続ける。  
まあさすがにバックグラウンドミュージックは酷すぎかもしれないが。」

「それにしても散々な言われようである。そんなに嫌われるような事

をした覚えはないのだが。

「変わるわよ、それはもう革命的に。」

しかし千鶴子さんもよく分らない事を言う。革命的と言われましても。

何と返したものが、少し逡巡していると、千鶴子さんは、さっきよりも大きめの声で言った。

「聞こえなかったの？革命的よ。それはまさにレボリューション！」

最後の方はポーズをとりながら宣言した。変なスイッチが入ってしまったかもしれない。

とりあえず、ポーズに突っ込むのは止めておこうと、僕は思った。

というか、聞きたいのはそういう事じゃなく                    いや、いいか。

明後日もう一度来てみれば分かるだろう。

× 頼娃Ⅰ 02 (把握)

この部屋に来るのはこれで何回目だろう。

何度来ても慣れる事など無いだろうと思っていたが、そこは人間の適応力の凄さ。

何だかんだいって、この風景も、別にそこまで変だとは思わなくなつた。

単に感覚が麻痺してきただけなのかもしれないけれど。

「ああ、茉莉さん。今日は？」

椅子に座って本を読んでいた頼娃君が、顔を上げて問いかけて来る。今日も全身真っ黒だ。

が、サングラスはしていない。

そういえば、初めて会った時以来、かけてる所を見ていない。

ちらりと見えた表紙から推測するに、どうやらそれは哲学書らしい。本当に何でも読んでもるな、頼娃君は。

この前来た時は、詩集を読んでいた。タイトルは……何だったかな。著者が日本人では無かった事しか、印象に残っていない。

あながち、【図書館の支配者】というのも、誇張ではないのかもしれない。

「うん、英知に本を薦められたんだけど。」

「はい、それで？」

「あいにく、英知は持ってないみたいなんだ。【此处】に来る前に



読んだものらしくて、それでここにならもしかしてあるかと思って」

「タイトルは何ですか？」

「【牧歌的な思想を軸とした殺人事件】っていうらしいんだけど、……ないよね。こんな変なタイトルの本。」

「ちょっと待って下さい。」

と言って、棚に向かった頼娃君は、1分もせずに戻ってきた。そして驚いた事に、その手には、僕の探していた本が有った。

「これですか？」

「……凄いね。もしかして全部位置を把握してるの？」

「はい。」

マジで！？それは凄いな。色々。いや、本当に。

「……すみません、冗談です。そんなに簡単に信じられるとは思いませんでした。」

冗談か。焦った。本当かと思った。

「いや、もしかしたら、って思わせる何かがあるよ、頼娃君には。」

「そうですか？それは光栄ですね。……ネタばらしをしてしまえば、その本、以前僕も英知さんに薦められましてね、その時に一度探していたので、位置を覚えてたんです。聞いてみればどうって

事ない話でしょう?。」

「それでも充分凄いのよ。僕なんて、自分の本棚でさえ把握出来てないくらいだからね。」

「ふふ。それで、その本読まれるんですよね?。」

「あ、うん。良かったら、貸してもらってもいいかな?。」

「ええ、どうぞ。一応こんな状態でもここは図書館なんですから、そんな風に遠慮しなくて構いませんよ。」

× 亜空 102 (芸術的爆発、上)

「血が騒ぐぜ。」

またしても食堂で偶然であった僕らは、自然に一緒に机を囲む流れになった。

例によって亜空は、僕の斜め前に座っている。

そして、開口一番に良く分からない事を言った。

僕の聞き間違いで無ければ、血が騒ぐ、とか聞こえたのだが。

この場でそんな事を言う理由が思い浮かばないし、意味も分からないので、きつと聞き間違いだろう。

聞き間違いだろうけど、だとしたら何て言ったのか気になるな。

「……………え？」

「血が騒ぐぜ!!」

違った。

残念ながら聞き間違いじゃなかった。

先程より大きな声で宣言された。

いきなり何を言い出すんだ。

「いや、え？何が？どういう意味？」

「だからな、血がふつつつと煮えたぎるように」

「うん、表現の説明じゃなくてさ、僕が聞きたいのは急にどうしたのかって。」

「別に。」

「別に？」

「ああ。ただ言ってみただけ。」

「言ってみただけ？」

返答が予想外すぎて、さっきから、ツバメ返ししてしまっている。

「言ってみたかったから、言ってみた。何かおかしいか？」

おか……………しいような、おかしくないような。

……………いや、やっぱりおかしいだろう。

「おかしい、んじゃないかな。」

「えー、そうか？でもお前もあるだろ？そついう事。」

……………どうしよう。

正直な所、そんな事無いんだけど。

ノッていった方がいいのだろうか？この会話に。

×英知102（愛好者）

「犯人がさ、最初から分かってるヤツつてあるだろ？」

例の自動販売機の前で、またしても英知と出会った。

横にある、古いタイプのベンチに　　まあ、新しいタイプのベンチなんて知らないんだけど　　座って、林檎ジュースを飲んでい

る。

何か英知とは、この場所に縁があるな。

「念の為に聞くけど、それは推理小説の話だね？」

機械に硬貨を落とし込みながら聞く。

今日は何を飲もうか。

林檎ジュースでは英知と被ってしまうし、ここは無難にオレンジでも　　いや、今日は缶コーヒーにしておこう。何となく。

「ああ、最近そういうのにハマってるんだ。」

そうなんだ、と相槌を打ちながら、英知の正面のベンチに腰を下ろす。

ちょうど机をはさむ感じになった。

「何で？」

「お、コーヒーか、大人だねえ。ああいうのってさ、逃げ道が少な

いんだよ、書いてる人の。」

「大人って、英知だつて飲むだろうに。逃げ道って？」

「いや、正直あんまり好きじゃないんだよ。いや、だからな、犯人が分かつてるわけじゃんか。」

無言で頷き先を促す。

「他の小説なら、どんな奇想天外なトリックでも、どうにかなうちまうもんなんだよ。意外な犯人だとか、意外なトリックだとか。」

「あと、最終手段として、語り部が犯人なんてのもあるね。」  
ずっと黙っているのも何なので、知っている事を言ってみる。

「アレはズルいな。読者に対して不公平だ。あとから矛盾が出てきたとしても、犯人だからあえてそこを見ないようにしてた、とかさ。」

「まあ、ね。」  
とりあえずあいまいに頷く。

あまり詳しくないので、深くは踏み込まないようにしておこう。

「それで俺が言いたいのは、犯人が分かつてる小説は、そういうのが無いんだよ。完全に理論的というか。」

何となく言いたい事は分かる。

「どうやって犯人に近付いていくかとか、犯人側の葛藤だとか、ああいうのを読んだとき、何かこう何ともいえないカタルシスが」

何かスイッチが入ってしまったかもしれない。

それから僕は、30分くらい、犯人が分かってる小説がいかに優れているかについて、聞くはめになった。

英知の前で推理小説の話をするのはなるべく止めよう、と思った。

× 亜空―03（芸術的爆発、下）

「うん。まあそうだね。」

とりあえず乗ってみた。

否定してばかりでは会話が續かない。

「だろ？じゃあ茉莉は、例えばどんな事をつい言っちゃまうんだ？」

やっぱり乗るんじゃないか、と思った。

どうしよう、今更嘘でした、では通らないだろう。

…………… やっぱり通りそうな気もするな。 亜空はそんな小さな嘘くらい気にしないだろうし。

でも、なんとなくそれは嫌だ。

「芸術は爆発だ。とか、かな、多分。」

仕方ないので、適当に思いついた言葉を言ってみる。

「何で？」

ぐ、何でと来たか。 僕も逆の立場だったら同じ様な事を聞きそうな気がするが、コレはきついな。

なんせ、何も考えずに言っただから。

「んーと、いや、ほら、何となく、だよ。」

自分でも嫌になるくらいしどろもどろになりつつ答える。



「そっか、じゃあそれ言ってみろよ。きっと理由が見つかるぜ。」

えー。

そう来るか。

……………乗りかかった船だ。こうなったらもつ、最後まで乗ってやる。

「芸術は爆発だ。」

「どうだ？何か分かったか？」

「いや、分からない。」

何が分かるのか分からない。

そもそも何でこんな事をするハメになったのかも分からない。

「もっと大きな声で言ってみろって。叫ぶくらいの気持ちでさ。」

え、嫌なんだけど。普通に。

……………でも、最後まで乗るって決めたしな。

「芸術は爆発だー!!」  
僕は。

「もつとー!!」

「芸術は爆発だー!!」  
何を。

「もつとだー!!」

「芸術はっ！！爆発だーっ！！」  
しているんだろう。

「君がそんなに芸術のなんたるかについて興味があるとは知らなかったよ。」

栞にじつくりと見られていた。  
いつの間に来たんだろう。  
全然気付かなかった。

「どうだ？何か分かったか？」  
亜空が聞いてくる。

「分からない。……僕は……もう……何も……わから  
ないよ。」

ああもう本当に。何も分からない。分かりたくない。  
僕は何をしているんだろう。

とりあえず、これ以上ないくらい、恥ずかしかった。

## ×フォリス―02（大荷物）

「あちよつとそこの貴方、貴方よ貴方、聞こえないのかしら、聞こえてるでしょ、聞こえててわざと無視するなんて、私に喧嘩を売っているのかしら、きつとそうね、そうなのね、それならそれで私も考えがあるわ、まさか腕力で自分が勝ってるからって、自分が負ける事は無いなんて思ってるんじゃないでしょうね、男女差別の極みだわ、大体貴方は」

あー、困ったな。

背後から特徴的な喋り方が聞こえて来た時に、僕が最初に考えた事はそれだった。

別に急いではないけど、できればスルーしたかった。

というかそもそも、何でいつもあんなに喧嘩腰なんだろうか。

誰に対してもそうなのか、僕に対してだけそうなのか、気になる所だ。

もし後者なのだとしたら、理由を探さなければいけない。

気がつかないうちに、フォリスの傷つく事を言ってしまったのかもしれないし。

「別に喧嘩する気はないよ。……………ていうか凄い荷物だね。」

フォリスは、ダンボールを両手で抱えて持っていた。

目の少し下まで積みあがっている。見るからに重そうだ。

「やっぱり気付いていたんじゃない、そうやっていつもいつも誰かを無視し続けて生きるのね、聞こえなかったなんていうのは言い訳よ、聞こえないんじゃないかってそれは聞こうとしていないっていう事なのよ、聞かなかった事にしても結局は意味なんて無いのよ、結局は自分が」

今度は何か語り始めてしまった。

……確かにさっきは、聞かなかった事にしようとしたかもしれない。

「……いや……まあ……持とうか？」

「つまり、っ？」

フォリスが言葉を止め、不思議そうな目で僕を見てきた。

そんな目で見られても、ね。

「いや、だからさ、持とうか？その荷物。重そうだから。」

「別に重くないわ、たくさん入ってるように見えて軽いのよコレ、体積イコール質量なんていうのは通用しない場合が多いのよ、何が重くて何が重くないかを考えるのが大切だと思うわ、それより貴方そこどきなさいよ、レディが通ろうとしていたら道を譲るのが当然でしょ、それに」

ん？結局どっちだ？持って欲しいのか？

どちらなのかは分からなかったが、とりあえず道を開けると、フォリスは無言で通っていった。

それを見送りながら僕は、体積イコール質量は、通用する場合の方が  
多いのではないかと、どうでもいい事を考えていた。

× 鞘香 102 (職人氣質)

「んー、やっぱりここの角度が気になるなあ。茉莉くんはどう思う？」

一見するとタンスにしか見えない【作品】の、上から三番目の引き出しを執拗に気にしながら、鞘香さんが僕に聞いてきた。

いや、正直他の部分との違いが分かりません。

こういう時英知に相談できると楽なのだが、生憎今は席を外している。

……タンスに見えるけど、いつもと同じだから、そこら辺に「気になる」要素が隠れているんだろう。

いや、でもなあ、外見と中身が全くデタラメなのだから、目の前のタンスが、実際は何なのか予測の立てようが無い。

かと言って、明らかに質問をされているのに無視をする訳にもいかないし。

致し方ない。思ったままを答えよう。

「……特に問題は無いと思うよ。」

嘘は言っていないから大丈夫……だろう。

「を？そうかな？でもやっぱりここのフォルムはもっと尖ってた方が。……んー、考えすぎかなあ。」

こついうのを、職人氣質というのだろう。

自分の作品にはとことんこだわりたい、という。

んーんー唸っている鞘香さんが、問題視している部分を、もう一度目を凝らしてよく見てみる。

木で出来たそのタンス      らしきもの      の違いは、やはり僕には分からなかった。

強いて言えば、木目の模様が違うが、そういう問題では無いのだろう。

僕が居たら逆に邪魔になりそうな気がしたので、部屋を辞す事にする。

部屋を出てしばらくしてから、結局アレは何なのかを聞くのを忘れた事に思い至った。

×千寿ー02（異端）

「ジョーカーって何だと思う？」

唐突にそんな質問をされた。

英知は読書に集中しているし、鞘香さんは、いつも通りに、何かを作っている。

それに、顔の向きからしても、明らかに僕に向けられた質問だろう。

「何って、それは、具体的な意味ですか？」

「聞ってるのは私よ。」

怒られた。というか窘められた。

……まあ、質問に質問で返すのは良くないしな。  
僕の思う所を言うでしょう。

「トランプの札、ですね。」

「あのね、貴方は私を馬鹿にしてるの？」

「いえ、すみません、冗談のつもりだったんですが。」

「……………もつと具体的に言いなさい。」

そしてやはり、今日も命令口調だった。

いやまあ、怒らせた僕が悪いんだけど。

というか、僕は真面目に答えたつもりだったんだけど。ある意味では。



「そうですね、イレギュラーな存在だと思います。」

「ふうん。」

「……………」

「……………」

いやー！いやいやー！そこで沈黙はおかしいでしょうー！

そういえば、前にもこんな事があったな。

「あの、それで、それが何なんでしょうか？」

「何が？それだけよ。」

「え、僕がどう思っただけ？」

「そうよ。不服？」

「……………いや……………あの。」

続く言葉が上手く思いつかない。何と書いていいものやら。

「なかなか本質をついてると思うわ。その言葉の意味を、よく考え

る事ね。」

そんな僕を見かねたのか、千寿さんはそう付け加えた。

そして、視線を水晶に移す。

もう話は終わり、と言わんばかりに。

……………考えると、言われても。

× 鞘香 103 (初期作品)

「鞘香さん、聞きたい事があるんだけど。」

「んー？何かな？」

木工用ボンドで、釘を板にひたすら張り付ける作業を続けながら、聞き返してきた。

えらい原始的な作業だな、今日は。

というか、それに何の意味があるんだ？

聞いてもきつと分からないから、聞かないけど。

最近、最低でも二日に一回はこの、【研究所兼探偵事務所兼占い所】に、顔を出している気がする。

いや、だから何だ、とかはとくに無いんだけど。

「今更って気がしないでもないけど」と、前置きを挟む。

「うん。」

と、相槌を返してくれる。

それにしても、木工用ボンドとはまた懐かしい。触ったのなんていつ以来だろう。

独特の匂いが、微妙に心地よかった。

「図書館にさ、【微妙に落とし穴】ってあるよね？」

「んー？うん。」

「アレって、何で、【微妙に何とか型何とか】って名前じゃないの？」

「んー、よし、やっとくつついた。この木は何だか相性が悪いのかな？」

と言った後、木と釘から手を離し、顔を上げて続けた。

「あれは初期の作品だからだよ。」

「初期？」

「うん、最初の頃はね、ああいう名前だったんだ。」

「ふうん。」

よく分からない。

「何で止めたの？」

「あだ名がつけにくいじゃん？」

「あだ名？あだ名って、【びこつう】とか、【びさそう】とか？」

「うん、【びおお】ってなるし。」

「落とし穴？」

「うん。【びおお】だよ？【びおお】。気持ち悪いでしょ？」

「いや、まあ。」

分からないけど。

別に他にも略し方はあるんじゃないか？

うんまあでも、鞘香さんなりのポリシーがあるのだろう、きっと。

僕が何も言わないでいると、それで話は終わりと判断したらしく、鞘香さんは作業に戻ってしまった。

× 栞 04 (天秤)

「ねえ茉莉君。一つ君に相談があるのだが。」

「うん。」

「大切な人がいるとするだろう？それは、家族でも、恋人でも、友人でもいい。」

「それは複数でもいいの？」

「ああ、複数でも、一人でも構わない。とにかく、自分の命と金の次くらいには大事だと思える人だ。」

「何か言葉にちょっと棘を感じるけど、まあ分かった。それで？」

「その人が死んでしまうのと」

一度言葉を切る栞。

僕の顔を見つめている。

否、観察しているという表現が近いか。

いつもの冗談のような話の一つかと思ったが、それにしては真剣な表情をしている。

.....物騒な話だな。

まるで僕が死んでしまうみたいな.....いや、違うか。全然違う。僕は死なないし、栞の中で僕がそんなに大きな存在の筈がない。心理テストか何かなのかもしれない。

「その人に、殺してやりたい程に憎まれるのと、君なら、どつちがいい？」

「……………どつちが、いいって、そんな。」

「どちらかと言われれば、だよ。いわば、その人を生かしておきたいかどうか、だ。」

「……………そんなの、生きてて欲しいに決まってるじゃないか。」

「本当に？大切な人に、憎まれるんだよ？ただただ純粋な憎悪を、向けられ続けるんだよ？いつ自分がその人に殺されてしまうかも分からない。」

「……………うん。」

「聞き方が悪かったかもしれない。君は、大切な人に憎まれるのに、耐え続ける事が出来るかい？」

「でも、生きてれば誤解が解けるかもしれないし。」

「誤解が解ける事はない。そもそも、誤解なんてものは存在しない。さらに、何かの漫画で有った様に、どちらを選らばないなんて事も出来ない。必ずどちらかを選ばなければならない。……………」

茉莉君。君はどつちを選ぶ？」

「……………それでも……………生きて

いて欲しい。僕は。」

「……………。すまない。ちょっと悪ノリしすぎたかもしれない。ところで茉莉君、【硬貨強度】の件だけど、あの後一つ思いついたんだが」



× 亜空 104 (方針)

「ん、どうした？珍しいな？茉莉がこの【増減の部屋】に来るのは。」  
「言いながら立ち上がり、一瞬にして僕の正面まで来た。間の空間を【縮めた】のだろう。」

「確か、苦手って言ってなかったっけ？この部屋。」  
「確かに言った。」

端が見えない広すぎる空間は、何だか不安定になるから。かといって、狭い所が好きな訳でもないけど。」

「まあね。………何でいつも【広げて】おくの？」

「狭いのは嫌いだし、広がったらスカツとするだろ！？」

「それにしても限度があると思うんだけど。」

「そうかもな。まあそれに、修行も兼ねてるし。」

「修行とはまた大げさな。」

「大きい事はいい事だ、っていうのが俺のポリシーだからな！！」  
「さいですか。」

「で、どうした？」

「うん、木霊さんを探してるんだけどね、初日に会って以来まだ」

回も会っていないんだ。部屋に行ってもいつも留守だし……………って何だよその顔。」

「いや、すまん。誰を探してるって?」

「だから木霊さんを」

「……………誰だ?ソイツ。」

「は?」

急に変な事を言う。

誰だ、って、そんなの冗談にしたって笑えないぞ。

「コダマ、とか聞こえたけど、俺の聞き間違いか?」

「……………いや、それで有ってるけど。え?何を言ってるんだよ、亜空。」

「お前が何言ってるんだよ。そんな奴俺は知らないぜ。」

悪質な冗談かと期待したが、どうやら亜空は本気で言っているらしいかった。

×千寿ー03（裏表）

「ねえ？」

「なんですか？」

「このトランプが、ダイヤの5だったら、私の肩を揉みなさい？」

「嫌です。」

「何でよー。」

と、だるそうな声を出しながら、手にもったトランプをひらひらさせる。

何でも何も、それをやるとしたら、表裏が逆だからね。

書いてあるマークを読むだけなんて、そんなの僕にだって出来る。

仮に、ちゃんと裏向きにして当てたとしても、そんな僕に何のメリットも無いような賭けに、乗る筈もない。

「じゃあ、僕の持つてるこのトランプが、ハートの6だったら、僕の肩を揉んでくれますか？」

「いやよ。それマーク見えてるじゃない。そんなの誰でも当たるわよー。」

「……………」  
自分の事を棚に上げすぎだと思う。

「ほら早く。もう何でもいいから肩揉みなさいよ。」

「いやですよ。……………何で今日はそんなにダルそうなんですか？」

「疲れた。」

「何に？」

「何かに。」

「……………。最近運動でもしたんですか？」

「別に。大体【此处】のどこにそんな広いスペースがあるのよ。」

「亜空の部屋とか。」

「…………面倒くさいから却下。」

「………………。というか、……………うん、まあいいや。」

「まあいいや、って何よ。中途半端に言いかけないでくれる？」

「…………【能力】を使ったら疲れたりするんですか？」

「別に。私は特に疲れないわ。人それぞれだと思っけど。」

「そうですか。」

「……………それにしてもダルいわねー。」

「………………。そうですねー。」

×千鶴子ー02（蜜柑）

「あ、茉莉君。こんな所で珍しいわね。」

自動販売機の横にある、古いタイプのベンチで、みかんジュースを飲んでみると、千鶴子さんがやって来た。

チャリチャリ、ガチャンと何かを買った後、僕の正面に腰を下ろした。

「で？今日は何でこんな所にいるのかしら？」

そもそも、僕がここにいるのは、そんなに珍しい事でもないのだけど。

まあ、千鶴子さんとこの場所で会うのは初めてだから、珍しいと、言っって言えなくもない気がするけど、その表現はやっぱおかしいと思う。

「……ちよつと休憩です。」

「あら？オレンジジュースなんて飲んじゃって、エロいわね。」

「……………え？何が？何で？」

「だって おるえんじじゅーす よ？ おるえんじじゅーす。」

「そんなの完全に言い方の問題じゃないですか！-」

「そつかしら？」

「そうですよ！！それに、それだったら、何でもこじつけられちゃうじゃないですか！！」

少し首を捻りながら、千鶴子さんはおしるをすすず、と啜る。  
おしることは、また……何とも微妙なチョイスだ。

「……なんでも、は無理だと思うのよ、さすがに。」

「いや、それは言葉のあやというか……」

「例えばこのおしるこなんか……」

ごくごく、と一気に飲み干して続けた

「どう考えても無理じゃない？」

「いや、おしるこは文字の並びがなんとなくエロ……って何を言わせるんですか！！」

慌てて自分自身に突っ込みを入れた。  
無断で人の体を動かさないで下さい。

千鶴子さんは、にやにやと僕の事を見つめていた。

「うふふ、やっぱり貴方とはいい友達になれそうだね。」

「……………」

面と向かってそう言われると、なんとなく恥ずかしい。

「じゃ、またね。」

ビシッ、とよく分からないポーズを決めた後、千鶴子さんはゆっくりと歩いて去っていった。

.....彼女は、要注意人物だな。と思った。

×千寿ー04（順応）

「あ、そうだ。聞こう聞こうと思って、ついつい忘れていたんですが、」

「んー？」

ダルそうに、机に突っ伏す千寿さん。完全に俯いてしまっている、聞いても大丈夫なんだろうか。

「あの、聞いてもいいですか？」

「ちゃんと聞いているから大丈夫よー。」  
手を頭の上でひらひらしながら言う。

「あのですね、最初はそんな感じじゃなかったですよね？」

「何て？」

のそりと顔を上げる千寿さん。

「いえ、ですから、最初はそんな風じゃなかったですよね？」

「何が？どういう風に？いろいろ略しすぎよ？」

「……………最初は、何ていうか、もっとしっかりしてたというか、喋り方も今とは違いましたよね？」



僕がそう聞いても、しばらくボーっとしていたが、やがて思いついたように言った。

「あーあれね。あれは、まあ色々理由はあるんだけど。一番大きいのは実験ね。」

「実験？」

「そう、実験よ。」

「……………」

「……………」

「あのですね、これも前から言おうと思ってたんですが、会話を区切る場所がおかしくないですか？」

「おかしくは無いわ。きつと。」

「……………それで、実験っていうのは具体的には？」

「営業する時の、話し方の。」

「あ、本気で将来占い師を目指すんですか。」

「……………喧嘩売ってるのね？それは。」

「いえ、そういう事では。……………そ、それより、いくつか言っ  
てましたが、他にも何か理由があるんですか？」

「そういう話の逸らし方は……まあいいわ。他には、ちょっとした遊びだとか、あと……」

変な遊びをしないで欲しい。

それより、何でそこで言いよどむんだろう？

「あと？」

「……………恥ずかしかったから。」

「恥ずかしい？」

「何で聞き返すのよ！！貴方は！！だから、まだあの頃は、人とういう風に話していいか分からなかったからよ！！分かった！？」

「あ、はい。」

まだよく分からないです。

「不愉快だわ。出て行って！！」

気のせいだと思うけど、少し顔が赤い。

今のを言うのは、恥ずかしかったのだろうか。

「……………いや、僕はまだ英知に用が」

「出てけ！！」

「……………」  
「追い出されてしまった。」

× 穎娃―03（憧憬）

ギギギ、と軋みながら、そのドアは開いた。

さすがに慣れて来たが、何回聞いても好きになれそうにない音だ。

「ああ、茉莉さん。今日も何か本をお探しですか？」

「いや、まあ、うん、そうと言えばそうかな。」

「……………？歯切れが悪いですね？」

「……………うん、あのね、今日は、明確に探す本を決めてある訳じゃないんだ。」

「はい。」

「つまり、穎娃君のお勧めを読んでみようかなと思って。」

「そうですか。……………僕の面白いと思う本が、必ずしも茉莉さんも面白いと思うとは限りませんよ？」

「うん、それでもいいよ。」

「なら、少しそこで待ってて下さい。」

頷いて、穎娃君は本を探しに行ってくれた。

待っている間、なにげなく恐竜の骨を眺める。

こんなに大きな生き物が、昔は何千匹もいたのだ。いや、何万匹かもしれない。

そんな時代に生まれなくてよかった、と、どうでもいい事を考えていると、少年が、両手で本を抱えてやって来た。

「う、え、さ、流石にそんなには読めないよ。」

「あはは、違いますよ。とりあえず見繕ってきたので、この中から読みたいのを選んでください。」

言って、横の机に本を並べだす頼娃君。

並べながら、言葉続ける。

「僕ね、恐竜が好きなんです。子供っぽいかもしれませんが、やっぱりかっこいいなあって。」

話題がえらく飛んだな。

さっき僕が、割かし真剣に、恐竜の骨を見ていたからかもしれない。

「確かにカッコいいね。でも、ちょっと怖くない？」

「そうですね、……でも僕は、一度見てみたいです。」

その気持ちは凄く分かる。

「そうだね、危なそうだけど、一回見るのは面白そうだ。……」

……コレ、と、あとコレを借りてもいい？残りはまた今度借りに来るよ。」

その後も僕らは、恐竜の話や、本の話で、小一時間盛り上がった。

× 栞 05 (下前上)

「茉莉君、こういう言葉を知ってるかい？」

ふいに、今までの話の流れをばつさりと断ち切って、栞が言った。

「そうなんだけど、僕が思うに数学っていうのはやっぱり  
え  
？」

何の前触れも無く話が変わったので、対応が遅れる。

え？【算数強度】の話はもういいの？

数学レベルじゃない、小学生くらいまでの算数を、どれだけの人が  
きちんと本質まで理解しているかという。

……いや、まあ僕はどっちでもいいんだけど。結構どうでもいい話だし。

それにしても急に話が飛んだな。

まあ駄目って訳じゃないけど。

そこらへん、やっぱり栞も女の子なんだなあ、となんとなく思った。

「……………どんな言葉？」

「前を向くのは、上を向くことよりも難しい。」

また何か哲学的な事か？普通に考えたら、その運動に使用する力とか、明らかに前を向く方が簡単に思っただけ。

「……………それはどういう意味で？」

「言葉通りだ。」

「よく分からない。」

「少しは考えなよ、だから君は馬鹿だというんだ。自分で考える事を止めると、思考が停滞するぞ。……そうだな、じゃあ、一番楽なのは、どの方向だと思う？」

さらりと罵言を投げかけないで下さい。

じわりじわりと確実に傷つくから。

「下、じゃない？」

「そうだ。……なんでそんな自身なさ気に答えるんだ。」

いや、何か引つ掛け問題かと。

「いろいろ考え方がるから。」

「ふん。じゃあ、前と上は？」

「前。」

「何で自信満々に答えるんだ。」

呆れ顔で言う栞。

じゃあ僕はどうすればいいんだ。

「物理的な問題じゃないんだよ？これは精神的な問題だ。」

「そんな事を言われても。」

「前向きに行き続ける事が大事だと言うんだ。……もういい、



なんだか疲れたから今日は帰る。」

何で機嫌悪くなるんだよ。

分からないものは分からないんだから仕方ないじゃないか。

栞が出て行ってから、僕が一番に思ったのは、それでもやっぱり、上を向くほうが難しいんじゃないかという事だった。

上を目指し続けるのも、同様かそれ以上に難しいのではないかと。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9663e/>

---

茉莉の日記

2011年1月8日23時54分発行